修士論文　（要旨）

2018 年 7 月

生活支援ハウス入居者の生活展開に関する研究

指導 石川 利江 教授

心理学研究科
健康心理学専攻
215J4055
並木 まゆ子

Master's　Thesis（abstract）
July　2018

A Study on the Lifestyle of the resident in the day living and housing service center

Mayuko Namiki
215J4055
Master's Program in Health Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor：Rie Ishikawa

目次

第１章　本研究の背景と目的 3
第１節　日本における高齢化の状況 3
第２節　過疎地域について 4
第１項　過疎地域の定義 4
第２項　過疎地域の高齢化の状況 7
第３項　過疎地域が抱える問題と高齢者 8
第３節　生活支援ハウスについて 8
第１項　生活支援ハウスの概要 8
第２項　生活支援ハウスの研究動向 9
第４節　集まって住まう場所 13
第１項　人々が集まって住まう場所 13
第２項　高齢者施設の居住者 14
第５節　目的 15
第２章　方法 16
第１節　研究のフィールドについて 17
第１項　U 村について 17
第２項　U 村の人口 18
第３項　U 村の特徴 18
第２節　U 村生活支援ハウスについて 18
第１項　生活支援ハウスについて 18
第２項　複合型施設の概要 19
第３項　生活支援ハウス入居条件・提供されるサービス 20
第２項　事業計画 21
第３項　生活支援ハウス入居者について 21
第３節　対象者 22
第４節　倫理的配慮 22
..... 22
第５節　調査方法 22
第６節　分析方法Ｍ－ＧＴＡについて 26

第７節　　分析プロセス 26
第３章　　結果 27
第４章　　考察 31
第５章　　討論と課題 33

謝辞

引用文献

資料

わが国では，高齢者の増加により，加齢による問題の解決が社会的課題となっている。高齢者の増加が顕著にみられるのが中山間地域（過疎地域）である。過疎地域の問題は，少子高齢化，共助継続，事業縮小の 3 つがあげられる。高齢者に焦点をあてると，高齢者は「生活変調」時，生活を維持できなくなり，孤立に陥る場合がある（越田，2008）。このような状況下の中，過疎市町村では，孤立した高齢者が安心して生活できる，生活支援ハウス（以下支援ハウス）という施設が造られてきた。生活支援ハウスが設置され，現在に至るまで，どのような研究が行われてきたのかを概観してみると，建築分野や社会福祉分野で生活支援ハウスの研究は散見される。建築分野における研究は，1990 年代にはじめられた。そこでは，施設整備，入居前後の生活実態，生活拠点移動の問題，前拠点との関わり，退去実態，などについての研究が行なわれてきた。最近になって，社会福祉分野において越田（2014a;2014b;2014c）により，支援ハウスの意義，設置経緯や，設置状況についての研究がなされている。しかしながら，入居者の生活の中での交流に焦点を当てたものは本邦では見当たらない。

したがって，本研究においては，生活支援ハウス入居者間および他者とのつながりの実態を明らかにし，入居者の生活展開を検討することを目的とした。

方法としては、U 村生活福祉センターの居住者 76 歳から 95 歳の 16 名に半構造化面接を行なった。面接内容については，一日の生活の流れや生活について，入居者の入居者間およびその他の人々との交流などを尋ねた。質問内容は適宜変更して行なった。分析方法としては，Ｍ－ＧＴＡ（修正版グランウンデッド・アプローチ）を用いた。

結果としては、生活支援ハウス入居者は，＜入居のきっかけ＞として，日常生活の不安や，体調の変化から，単身者・夫婦世帯での暮らしが難しくなった人が家族や保健福祉課・社会福祉協議会職員の後押しを受けて入居する。入居者は，生活支援ハウスに＜入居することに対する不安＞を持ち，住み慣れた家を離れることへの寂しさ，新しい生活が始まることへの不安を感じながら入居を待つ。このような【生活拠点移動への葛藤】を抱えて，入居へ至る。

入居し生活を始めると，＜安心して生活できる場がある＞ということに感謝を感じる。生活支援ハウスの環境・提供されるサービス・人との関わりから安心して生活ができる場だと認識する。それは，日々感じることができる。簡単なキッチンのある個室があることで，昔から慣れ親しんでいるものを調理したりし＜食を楽しむ工夫＞ができたり，入居前から生活に織り込まれた趣味や習慣といった＜長年の習慣を継続＞させることで，変化に乏しい生活の中で工夫することで【生活の個人的楽しみ】を作り出している。

しかしながら，入居者は，入居者自身の体調変化，環境，ハウス内のルール，人間関係など様々な問題を抱え，折り合いをつけながら生活することとなる。入居者は，＜不満感・不安感との共生＞し日々を過ごしている。

入居者は，＜安心して生活できる場がある＞ことで，生活支援ハウスに居続けたいという思いを持つようになる。それは，家族に心配をかけたくないという思いや，先々の不安もあるが，生活支援ハウスで生活するメリットを感じることができるからである。そのメリットとしてあげられるのが，＜お茶

のみ交流＞＜おすそ分けをする＞＜新しい関係が生まれる＞＜変化をもたらす刺激＞である。これらが生活する中での楽しみである。

居続けたいという思いは，＜自分の身体の変化＞＜入居者の変化＞という【心身状態への注視】に向けられ，＜敏感に察知し慎重に行動する＞といった【ひたむきな努力】につながる。身体機能の維持を目的とした自主的な活動することで，体力の現状の維持または，向上が期待される＜運動日課＞をかし，＜入居者の変化＞を感じながら生活することで，＜物忘れ予防＞すなわち，物忘れや認知症予防となるような学習・手作業・記録・自ら編み出した予防法を行なっている。また，＜健康維持のための工夫＞をし，現在の状態を維持するために，怪我をしないように気を付ける。病気にならないよう気を付ける。さらに，食事の工夫，日ごろの体調管理などを行う。

ハウス内交流に着目すると，入居者は，良好な人間関係を保つことができるように，人と接するときには注意し，＜ここちよい関係を保つ＞よう注意して行動している。＜ここちよい関係を保つ＞ことが影響し，自然と＜一緒に行動する＞というルールができてくる。それは，朝昼晩の食事の際，呼び合い，集まって食堂へ向かうように，みんなと同じ行動をとることである。また，トラブル回避のため，＜周囲に気を配り＞行動している。このように＜周囲に気を配る＞なかで，朝昼晩の食事の際，呼び合い，集まって食堂へ向かうような，みんなと同じ行動をとること。すなわち，＜一緒に行動する＞というような目に見えないルールが生まれる。また，＜当番作り＞をして，工夫し，補い合い，協力しながら生活している。

このようなハウス内の交流のなかで，＜新しい関係が生まれ＞ハウス内で交流するなかで，気心を知る仲になる。しかしながら，生活するなかでの不満や，対人とトラブル，悩みを相談できる＜本当の気持ちを話せる人の存在＞をハウス内で見つけるのは難しい。社会との交流が入居者の息抜き，ガス抜きの役割を担っている。

今後，高齢者が生活支援ハウスで，安心した生活していくためには，物理的環境の満足を維持していくことだけでなく，逸脱を恐れるあまり，居住者自らが作り出した精神的プレッシャーに対する対策が必要といえる。フォーマルとインフォーマル両面からのアプローチが必要だと考えられる。

引用文献

木下康仁(2003).グラウンテッド・セオリー・アプローチ；質的実証研究の再生.弘文堂

厚生省（1989）．高齢者保健福祉推進十か年戦略（平成 11 年度までの十か年の目標）

厚生労働省老健局長（2000 ）．厚生省老人保健福祉局長通知　老発第 655 号

越田明子（2008）．後期高齢者の生活変調と社会的孤立 ： 過疎地域における単身高齢者の事例より 長野大学紀要，29，(4)，309-319

越田明子（2014a）.自治体の福祉政策過程における基礎自治体と社会福祉法人の関係 ： 介護保険制度開始以降の生活支援ハウスの設置をめぐって　長野大学紀要 36(2)，81-87,

越田明子（2014b）.自治体福祉政策の実施過程における生活支援ハウスの意義 ： その設置目的と実際の機能　大学院紀要 = Bulletin of the Graduate School, Toyo University 51(社会学・福祉社会)，115-140

越田明子（2014c）.国の福祉政策と自治体による施策の実施過程に関する研究 ： 生活支援ハウスの設置をめぐって　社会福祉学 55(3)，12-28,

小谷部育子(著)（1997）.コレクティブハウジングの勧め（エコロジー 建築・都市）丸善

小谷部育子・住総研コレクティブハウジング研究委員会　（２０１２）.第 3 の住まい-コレクティブハウジングのすべて-（住総研住まい読本）エクスナレッジ

井出康 ・磯野綾 ・土久菜穂 ・山本明（2012)，　過疎地域における高齢者福祉施設の実態 ： 長野県北相木村生活支援ハウスを事例として 学術講演梗概集，157-158

宮信一朗 ・片岡正喜 ・ 鈴木義弘 ・中武啓至 ・ 李東熙（1998）.高齢者生活福祉センターへの生活拠点移動(リロケーション)に関する研究 ： その 3-入居後における前拠点との関わりについて 学術講演梗概集　513-514

三輪祥吾 ・園田 眞理子(2010)，単身高齢者が居住する生活支援ハウスの空間特性に関する研究(居住の協同性,建築計画 II)　学術講演梗概集，319-320,

李 東熙 ・ 片岡 正喜 ・ 鈴木 義弘 ・ 中武 啓至（1997）．高齢者生活福祉センターへの生活拠点移動(リロケーション)に関する研究 ： その 1-入居前の住生活実態と問題点について 学術講演梗概集．45-46

李 東熙 ・ 片岡 正喜 ・ 鈴木 義弘(1999)．高齢者生活福祉センターへの生活拠点移動後の住生活と問題　日本建築学会計画系論文集（517)，157-164

李 東熙・佐藤誠治・金貴換 ・劉 作(2003)，過疎地域における高齢者福祉施設の整備システムに関する研究 ： その 2 - 生活支援ハウス入居者の退居実態について(入浴系施設,建築計画 I)　学術講演梗概集，549-550

鈴木健二・ 友清貴和(2004)，鹿児島県における生活支援ハウスの整備状況と入居高齢者

の生活展開(グループホーム,建築計画 I) 学術講演梗概集, 301-302
坂本 圭一(2014), 生活支援ハウスの利用実態調査 ： 過疎地域の医療福祉住環境のあり方に関する研究(地域における高齢者施設,建築計画,2014 年度日本建築学会大会(近畿)学術講演会・建築デザイン発表会) 学術講演梗概集, 233-234,
佐藤 (2013) ,シェアハウスにおける共有に着目した環境行動研究　早稲田大学大学院修士論文
柴田・博杉澤 秀博・長田久雄 (編)(2007), 老年学要論―老いを理解する　建帛社
高橋儀平(1993). 過疎地居住と高齢者生活福祉センターの計画課題 ： 過疎山村地域の高齢化と居住環境整備に関する研究 その 8　学術講演梗概集, 373-374
全国過疎自立促進連盟,　http://www.kaso-net.or.jp/
全国ライフサポートセンター　(2014) . 集落における地域支え合い - 地域づくりとしての地域共同ケアへ